
織斑家の最強お父さん！

親バカ最強パパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑家の最強お父さん！

【Nコード】

N7710X

【作者名】

親バカ最強パパ

【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに・・・。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろう。二人が立派に育つその日まで・・・。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

親父、始めました。（前書き）

ネギま！にとあるが浮かばなくなったから息抜き。

もうひとつのISは真面目に書いてるから息抜きにならん。

親父、始めました。

本日は晴天なり。

空には憎たらしいほど太陽がさんさんと言つよりかんかん照っております。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑おりむら春樹はるき。

年は三十路、詳しく言えば三十二歳。バリバリのおっさんをしています。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめてニート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・・・

——兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられないから・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そりゃない
ゼマイシスター」

「あ、あの・・・よろしく願ひします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。

玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と息子が手紙を持って現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿二人・・・！子供を押し付けて蒸発しやがったな・・・！

「・・・ん~~~~~まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します・・・」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞆と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張ってソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「・・・おい。まさか秋枝^{あきえ}はお前らを残して消えたのか？」

「・・・・・・・・それは・・・」

「ああ・・・いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すとやっぱり少し暗い顔して俯いた。

「……んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋枝の夫）とどこかに行つたんだろ。昔に親父に勘当されたくせに俺を頼るとは死にたいのかあの馬鹿は？やはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働かずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。」

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか……。

「んー、行く宛はあるか？」

「……ない、です……。」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時に病気で死んでる。

親戚はいるがいつもこいつもろくでなしだからな……。

……仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わって俺がお前らの親父になってやるよ」

「え、でも！春樹叔父さんに迷惑が……きやう！？」

バチンとデコピンをするとマイシスターの娘は額を押さえて涙目で見えてきた。

さあてさて。まずは組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・！」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし育児放棄したらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、もしも組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝が育児放棄するのが見えていたようだ。

取り敢えず昔に世話になった人達に電話をして養子縁組申請せねば。

額を押さえながらおろおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。

娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうおやつさん。助かったよ」

『気にすんな春坊。死んだオジキからの頼みだからいくらでも言えや！他にすることないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがと。じゃあな」

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするといいていけない娘に目を向ける。

「おい」

「は、ひゃい!？」

「出掛けるぞ。上着を着ろ」

「え? え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。

のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負うと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負うとマンションの一室から出て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあやす。

昔から親戚のガキの面倒を見てたから慣れたものだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・！」

「いやあああああつ！！織斑さんが子供を連れてるううううう！！」

「神は死んだ！狙ってたのにいいいい！！」

そんな声が聞こえたのはご愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシスターの子供は俺の養子となった。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あったがまずはマンションに帰ることにした。

「というわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしる。部屋はまだあるからそこ使つか？そっちは俺が面倒見なきゃならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、次顔見せたら潰す」

「（・・・あ、あの人が言った通りに怖い人だ・・・）」

・・・・織斑春樹。二児のパパになりました。
娘、おりむら ちふゆ織斑千冬。息子、おりむら いちか織斑一夏。

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。
現在住所ちよい高めのマンション。
残金・・・二億七千万。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“ラストサムライ生ける最後の侍”と呼ばれる人類最強。
現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

親父、始めました。（後書き）

簡単なプロフィール。

織斑春樹

♂

三十二歳

無職。ニートとも言う。

身長は184、体重は58、体脂肪率3%以下の女の敵。
体は鍛えてる方。かなりの傷があり。

千冬のように黒髪を後ろで纏めて伸ばしている。目は突然変異のルビーのような赤色。
顔は整い、千冬にそっくり。この場合は千冬が春樹にそっくりである。

趣味はゲームに料理。任侠の女性に学ぶ。

“最後の侍”^{ラストサムライ}と呼ばれ、人類最強の戦闘力を持つ。
ISを素手で破壊するほど。

ちなみにドS。理不尽極まりない性格であり、将来は千冬がそれを
受け継ぐ・・・。

親父、頑張る。（前書き）

取り敢えず一話だけ投稿。

というか一晩過ぎてお気に入りが増えてるのにビクって珈琲吐き出したぞ。

前話にて千冬の年齢を七歳から九歳に変更。
こちらの方が何かといい気がしたんで。

前話のプロフィールは春樹は千冬っぱい。でわかっていただければ。
体脂肪率3%は可笑しいか？うちの叔父なんかリアルに体脂肪率3%に近いんだけど。
しかも元自衛隊。

親父、頑張る。

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。
というか日差しに当たりながら昼寝をしています。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。
涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子に
サンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにNewパパさんであるわたくしは育児のめんどくさにダ
ウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減ってもギャ
ーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・。

軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で逃
げやがったな。

「・・・すー・・・すー・・・にへへ」

「・・・涎がダラダラやん。これ、お気に入りのシャツなんだがな」

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染みを
作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メって写メって〜。

二人、千冬と一夏を引き取ってからすでに一ヶ月。秋枝の馬鹿は姿は見せないから徐々に説教のレベルを上げようと思うこの頃。

千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入り
の料理はきんぴらごぼうである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボデーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやったことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は
会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほっ」

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を
伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でフィッシング。
テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑っていいかもを試聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。

日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しな
から試聴試聴。

「・・・にへへへ・・・お父さん・・・」

「あぁっ！千冬の奴、さらに涎を！？」

定番のいいかもっ！を言った途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。

長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押して退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

「離せ千冬！冷たいんだよゴラァ・・・あぁっ！洗濯物干さなきゃ！」

「でへへへ・・・」

仕方がなく、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。

ちなみに二人に買い与えた服は二桁を越えている。正直、服なんかわからんから適当に買った。

予算はユ。クロにて買ったため、一万以内。

一夏はベビー。らすで服やらガラガラやらオモチャを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の金が消えていきます。

駄菓子菓子!!

親父が残してくれた金をおやっさんがくれたので口座の金の桁が跳ね上がる!!

・・・最初見たときは目を疑ったね。0の桁が二つ上がったもん。

親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴラァ・・・。

「今日は天気がいいからもう少し干すか。というかい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセミよろしくへばりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬ごとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら寝てやがった。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

—アホーッ、アホーッ—

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。
自分の現状に気付くとトマトのように赤くなって暴れる。顎を殴ら
れる。ちなみに昇。拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから二人で鍋をつつくことにした。

一夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。
ミルクを飲んでいたまえ。

「あーお父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食うのも食われるのも当たり前なのだよ千冬！」

「！？し、知らなかった・・・！さすがお父さん！勉強になる！」

・・・ふつ。チヨロいな・・・ガキなんざこれにて封殺できるのさ。

大人気ないな俺。

そして将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどっぴり入れて完食。二人分だから腹はちようどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナニコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言う千冬の後ろにはバタバタ手足を動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座って緑茶を飲みながらホッと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いといてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しずつ生えてるがまだクソ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かった。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

パシャパシャとシャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・まだチ。コは小さいな・・・俺は大口径マグナムだが。

「うー、あー、あー」

「ん？もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカクンカクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないよ

うに丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。
なのに千冬は一緒に入る！と言って聞かないため、仕方なく入浴。
俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし・・・」

「そ、そう・・・やった・・・」

湯船に二人で浸かりながら話すと予定ができた。

こういうのを話していると千冬が成長していると実感できる気がする。

こうして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものごとく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら
熟睡開始。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

今日も元気に過ごせました。まる。

親父、頑張る。（後書き）

しばらくはほのぼのと書きます。

この頃の千冬は捨てられてあなりましたが春樹がいるため改変。
原作の千冬の正確には近いが少しあれ。みたいな感じに。

ちなみにヒロインはいません。今のところは。
一夏ラヴァーズを応援する立場になりそう。

親父、育てる。(前書き)

なんかお気に入りがスゲーんだが・・・

感想でよくあった体重の件ですがこれはいわゆるフラグです。

また詳しく書きますが出来たらそれには触れないでほしいです。

というかアクセス二日で八万とかパネエな・・・

親父、育てる。

本日は曇りのち晴れなり。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくい日である。

実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してあります。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。

我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

「あー、あー」

「いてててて！髪を引っ張るな一夏！」

きゃっきゃつと笑うベビーボデーのマイサンは俺の髪を引っ張って遊んでおります。

髪を切るのはめんどくさいから簡単に整えて縛ってポニーテールにしている。

そのため、一夏の一番お気に入りのおモチャとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを発揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。俺が義理の父親になったことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからないって事はなかったのでパパとしては一安心一安心。

「まむまむ」

「ぎえあああつ！？一夏、俺の髪を食べるでない！」

ポーツと一夏を組んだ脚の中にすっぱり埋めて平日の笑っていいかもを見ていると一夏がポニテの俺の髪を口にくわえてもむもむ食べていた。

離させようとすればごねるため、何かないかと周りを見渡す。

司会のマリモさんの声と観客の笑い声が聞こえるのを傍目に、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のしゃぶり器は一夏が気に入らないから駄目。オモチャ・
・却下。

・・・一夏って・・・なんなん？

「あー！あー！」

「いだだだだっ！」

どうするか考えていたら一夏に思いつき髪を引つ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーツと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求してやがる。

「あー・・・わかったわかった。準備するから待てや」

「あー！あー！あいー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・」

両手を上げて喜びを体现する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・ああ・・・親父・・・刻が見えるよ・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものようにミルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶を持ってぐびぐび飲み始めた。

「あいー！」

「……………一夏のバックに銭湯の脱衣場が見えた……………」

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶとぷはー！と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男が見えた。

「……………疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？」

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作った焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「あー！あー！あいー！あーうー！」

「……………少しは静かにできないのかおのれは。ジャングルのゴリラみたいだぞ」

なぜか一夏はチーターのごきげんようを見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

「……………将来は親父似だな。おふくろの要素はないわ。」

秋枝はどちらかといえはおふくろ似だけど墮落したしな。デキ婚なんかするからこうなるんだよバカシスター。

焼きそばを食い終わると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みゃーうー！」

「いだだだだっ！痛い！痛いって一夏！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にぶら下がって遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴った。

「あいー！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーうー！」

「・・・もうどうにでもなれ。親父、昔は苦勞したんだな・・・子育て大変だ」

一夏を抱き上げてソファーに座ると一夏は手を伸ばして鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたりと好き放題していた。

なすがままにされていると疲れがどんどん貯まり始め、気のせいかげっそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姐さん呼ぼうかな？

ホームヘルパーはやめとこう。仮にも俺は四季組の組長の息子だから誰かが襲いそうだから却下。
姐さんと呼ぶにしても貞操を寄越せと言われそうだから却下。

……駄目だな。親父が生きてればなんとかだったが一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな……」

「うー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらどうしようかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやっさんのツテで就職するつてのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何してますか？って言われたから働かねば。

二ト生活前には工事現場、四季組のカチコミ応援、外国にてテロリスト狩りをしていたな。

俺がまだ四季組の一員として動いていた頃はこんな苦労はなかったんだがな……親戚のガキって言っても小学生くらいの奴を世話しただけだしな。一夏みたいな赤ん坊ははじめてだ。

そして辛い。死ぬ。疲れる。簡単に引き取ると発言した俺を殴りたい。

でもたまに見せる千冬のはにかんだ笑顔、一夏の喜ぶ姿を見ればそれは無くなった。

ああ、俺は尊い命を育ててるんだな。と改めて実感させられた。

「一夏、ほれほれ」

「あう！ あー！ あー！ あー！ あー！ あー！」

考えるのをやめ、自分のポニーテールの髪を猫じゃらしのように二夏の目の前で振る。

一夏、絶賛反応中。猫のように髪を掴もうと小さな手でキャッチング中。

しばらく遊んでいると千冬帰宅。

赤いランドセルを背負ってリビングにログイン。

「ただいまお父さん」

「お帰り千冬。今日はどうだった？」

「んー、特には無かった。でも遠足があるからプリントをもらってきた」

「……ん？遠足？こんな寒くなってきた時期にか？」

ポニーテールの髪を一夏がギリギリ届くか届かないかの場所に垂ら

すと千冬からプリントをもらい、チェック。

一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうになれば触らせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み終える。

11月7日に遠足・・・よくよく見たら弁当持参って書いてるな。
・・・あれ？俺が作るのか？

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗ってうがいへゴー。冷蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきます！」

ダダダツと千冬が洗面所に向かうといまだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。

泣きそうな一夏を心を鬼にしてチーズケーキを出してホットミルクを出しておく。

千冬が戻ると一目散にチーズケーキにかぶりつき、完食。

「宿題あるならやつとけ。飯はまだかかるからな」

「わかった！」

「できたら檻に入ってる一夏の相手もよろしく。オムツは変えたからやらなくてよし」

そう言うと包丁でネギをとんとんと切っていく。

千冬はランドセルからプリントやらノートを出して宿題をし始めた。

「んー・・・味が薄いかな？味噌味噌・・・っと」

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作っていく。

刻んだネギを味噌汁に入れると一回、二回、三回とかき混ぜて火を止めてからテーブルをしっかりと拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くと千冬は一夏と遊んでいた。ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「いただきます」

千冬としつかりいただきますを言うとまずは豚のしょうが焼きを食べる。うん。うまい。

千冬を見るとパクパク食べており、嬉しそうにサラダにドレッシングをかけていた。

俺は空の茶碗に盛り盛りと白米を盛ると二杯目を食す。

「取り敢えず弁当は作ろう。何がいい？」

「きんぴらごぼう」

・・・二回目だけど・・・。

お前は年寄りか。

弁当の中身は決まったな。

まずは千冬ご要望のきんぴらごぼう。そして定番の玉子にタコさんウィンナー、後は子供らしくハンバーグでも入れよう。

うーむ・・・親父も違うが姐さんも料理得意だからな・・・かなり鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなきゃな。

今までは小学校の給食で弁当いらなかったから朝飯だけでよかったが弁当となれば早起しなくては。

四季組にいた時は普通に昼前まで爆睡してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。

一夏はすでにドリームインしており、ベビーベッドで寝ている。

「・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもらいたいものだな」

そう考えると昔のあの記憶が蘇って体がブルリと震えた。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出て牛乳を飲んでいた。
・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳飲むのが好きだったからな。

皿洗いを終えると昼に洗った分まで乾燥機に纏めて入れてスイッチオン。明日の朝には終わってるはず。
着替えを持って脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・昼の疲れが癒される・・・！
こうして一日は終わるのであった。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

一夏はヤンチャである。まる。

親父、育てる。（後書き）

赤ん坊ってヤンチャだよ。昔もそうだって聞かされてたし。

ニート生活、パパ生活してますがニートは卒業しそう。

だって“僕のお父さん”でニートと書きたくないもん。

姐さんとおやっさんはISでもかなり有名な人になります。

おやっさんは・・・うん。姐さんは間接的、かな？

親父、思い出す。（前書き）

あわわわわ・・・！お気に入りが1000件な上にアクセスが十二万だと・・・！

息抜きで書いてるがメインになりそうな予感。

親父、思い出す。

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するにはもってこいである。

少し肌寒いが、服をしっかり着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

場所は誰が決めたのか、動物園と水族館がある大規模な公園である。

「あー、あー」

「・・・眠いんだよ一夏・・・少しだけ寝させてくれよ」

「あー！あー！」

「・・・」

そして俺と一夏は家で留守番、というよりはいつものようにだらけた生活をしている。

・・・というか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではしゃぐ一夏を眠たそうに

見ながら一夏のペシペシを止める。

そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持つてまむまむと口に入れて食べ始めた。

「・・・一夏にとって俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだったし。

「・・・なんだよまた電話かよ・・・はい」

『よつす春樹！』

「・・・お客様がお掛けになった電話番号は現在使われておりません。もう一度、電話番号をお確かめの上、掛け直してくださいクソツタレが」

『なんで！？春樹、昔からなんでそんなに冷たいんだ！？』

「自分の胸に手を当ててよく考えてみる。お前、いちいち俺を騒動に巻き込んでるだろうが」

『あー・・・それは・・・すまん。体質だわ』

「余計にタチ悪いわアホウ・・・で？何の用だ？パパさん生活でノックアウトした俺をまたコキ使うのか？ん？」

『・・・いまだに信じらんねえな・・・あの“羅刹”だなんて言われたお前が子育てなんて・・・組長が知ったらどうなるんだろうな？』

「親父ならまず二人を溺愛するだろうな。あらゆるツテで大トロやら高級な食い物を用意しまくりそうだ」

「……言い得て妙だなそれ。組長ならやりそうだが……」

実際に俺は親父に遊園地行きたいって言ったら丸一日貸し切りにして他の客に多大な迷惑をかけたことがあるし。

他にもやることがあったが秋枝は親父に可愛がられてたからな……親父、あのクソガキと駆け落ちした時の怒りっぷりは半端無かった。

八つ当たりに密漁船とか海賊の船を素手で沈めてたしな。止めるのに苦労した。

「お。そうだ春樹、お前に伝えたいことがあったんだっ」

「あ？」

「組長がお前と千冬ちゃん、一夏くんに会いたいとき。織斑家の濃い血を継いだ秋枝さんの子供にな」

「……ちなみに千冬と一夏はまだ子供だぞ？組長は二人をどうするつもりなんだよ……」

四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言われている。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、長男が組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入っている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。千冬と一夏も“冬”と“夏”がある。

親父は冬樹ふゆで“冬”を持っていた。おふくろは嫁いできたからないが。

織斑家直属はみな、ある特徴を持って生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持っている。

俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれる人類最強の戦闘能力を持っている。

『ま、仕方がないじゃね？組長、今の内に二人を抱え込もうとしてるようだし』

「・・・はあ・・・一夏はともかく、千冬には才能がある。おそらくは“人の上に立つ”才能がな」

『でもまあ・・・春樹には敵わんだろ。ワンパンチで戦車を破壊できるしな』

「親父なんか第二次世界大戦で戦艦を四隻も素手で沈めてるだろ。俺なんかじゃガキみたいなもんだ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・あのな。どっちもどっちだからな？』

なんで織斑家にはバグキャラしかいないんだ・・・と電話の向こうから聞こえてくるとブチツと切る。
いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になってから家事やらで忙しかったから久しぶりだな。本当に。

「・・・・・・・・なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そう。

親父で四季組二代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。二人しかないが。

現在の組長は代理組長で俺は組長と呼んでいる。

四季組二代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にはならなくてもいいと言われている。

親父は小さい頃に自由に生きられなかったからせめて息子だけは。と自由にしてくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー」

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行ったのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神経で熊を撃退したが全治三ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治ったのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経歴がある。

なんとか生き残ったのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学二年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかった。

退院すると真っ先に親父に殴りかかったが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になった事がある。

退院↓親父に殴りかかる↓返り討ち↓入院↓ナースさん達のオモチャになる↓退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじゃねえな。

中学に上がってから親父に勝つために知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学二年生から折れなくなってきた。

俺は知らないがボロボロの姿が男らしいと中学のアイドル的な存在になってたらしい。

中学三年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上がると親父と互角に渡り合っていたが、親父は今の今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。貞操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はあんな七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となった。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をしてる組織も潰して回った。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組はバグキャラ、“最後の侍”ラストサムライだなんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかった。

秋枝が駆け落ちした心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝った・・・が。

絶対に親父、天国にしろ地獄にしろ、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しいではないけど。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠っている一夏を見ながらそう思うと親父の話を聞かせようか迷った。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思う。

俺が小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知ってるからな。
一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙なテンションに染まりそうで怖い。

――孫の顔が見たい――

「ぬおっ!？」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファから飛び起きた。

「いたい・・・!」

「ん? 帰ってたのか千冬・・・っていま何時だ？」

下を見ると千冬が額を押さえて涙目になっており、ジロリと見てきた。

そして時間を確認すると午後五時。どうやら昼前から爆睡してたようだ。

千冬は帰ってきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになって覗いているとひっくり返し、痛みに堪えてるらしい。

ちなみに一夏は千冬がベビーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

「お父さん、もう夕方だけど寝てていいの？一夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど・・・」

「んあー、悪い。朝に早起したからつい、な・・・」

「うー。一夏、お腹が空いていて泣いていたんだぞ？気を付けてよお父さん」

あー、それは悪い事をしたな・・・一夏には少し高めのミルクをあげようか。

千冬は一夏の頭を撫でながら言うが反省しないと。あまり空腹にさせると成長に悪いって親父が言ってたしな。

拗ねた感じの千冬の要望、“ぎゅーっ”と抱きしめて？”により、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く・・・だが。人類最強の俺が本気を出したらスプラッタになるのは見えているから。

「えっとね！今日の遠足は・・・」

「ほうほう」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について話し出す。

動物園でライオンとじゃれた、ゴリラと握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のくだりはツツコミをするべきなのか？

「でね！ゆうなちゃんが弁当を交換しようってやってね！美味しいって言ってくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからね！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを主にして」

「本当！？」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間があるので千冬と一夏と買い物に行こう。

ジャ。コでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が数十人いるから余裕で買い物はできるだろう。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパーカーを羽織ってから一夏のベビーカーを玄関から出す。

千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒くないように毛布をかけた。

「なんかいる？好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「・・・む」。ありそうでないよお父さん」

「考えとけ。じゃ行きますか」

「おゝ！」

「あいゝ！」

ジャ。コに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。シヨッピング中は逆ナンが多かったので疲れた。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

改めて親父がどれだけ規格外かを思い知らされた日だった。まる。

親父、思い出す。（後書き）

織斑家のくだりはオリジナルな設定です。あんまりツツコミしないでもらえると嬉しいです。

親父はこの世界の最強のチートです。また武勇伝書きたい。

親父、祝う。（前書き）

時間が少し飛びます。

天災と妹、早く出したいな。

親父、祝う。

本日は晴天なり。

寒かった冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなってきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと！今日は記念すべき日なのだ！
我が息子、一夏の二歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはここでいい？」

「いいぞ」

「あうー！」

というわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝うことにした。

あれから一年近く、千冬と一夏と暮らし始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝った。

ちなみにだが千冬は十二月七日、一夏は九月二十七日、俺は九月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を与えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、初代四季組組長の事である。

「それよりお父さん？一夏のプレゼントってあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組からのプレゼントなんだが。
組長代理や昔に親父にお世話になった奴等、おやつさん、姐さん、
四季組の幹部メンバーが一夏に贈ってきたのだ。

若様にプレゼントを！ってな。

千冬の時もあいつら、一夏と同じくらいのプレゼントを贈ってきたからな。

千冬が啞然としていたから予想なんかつかなかったんだろうな。

取り敢えず中身を確認したら出るわ出るわでさすがの俺も呆れ果てた。

ドスやら日本酒やらチャカ（拳銃）やらと子供にあるまじきプレゼントがあった。

それらは四季組に贈り返して贈った奴等を血祭りにしたが。

「・・・お父さん、また変なの入ってないよね？」

「・・・不安すぎる」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬に似合うものがあったがどれも高級品のため、少しあれである。

他にも洋服や着物を贈ってきたがそれは大事に仕舞ってある。

準備を終え、プレゼントの山を千冬と眺めていると不安のせいか、プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出してる気がする。

「・・・お父さん、やってよ」

「・・・千冬に譲る」

「「・・・」」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合って固まる。

「「・・・じゃん、けん！」」

「ぼん！」

「ぼおおん！！」

俺、パー。

千冬、チヨキ。

勝者、千冬。

「・・・・・・・・神は残酷だ・・・・」

「やった！去年みたいな事はしなくて済む！」

「・・・・変なものを見つけたらもなく地獄への片道切符を贈ってやろう。オプシヨンで本気のグーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの山の中を調べる。

・・・・うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供とかいたのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でしょっぱかれそうになったし。

四季組は日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではどうにもならん。

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ・・・・ねえ？

「・・・案外マトモだな」

「あれ？これっておしゃぶり？」

「他にはオムツやらなんやらベビーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベビーグッズしか出てこない。

今年はヤバいものはないのか？と思いながらさらにプレゼントを確認していく。

七割方終わると合計120ほどのプレゼントが開けられた。

その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそうなものがわんさか出てきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところにとんでもないものが出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジでか？」

「金ぴか・・・！」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎっしりと詰まっていた。
差出人の名前は・・・あの変態ロリコン幹部かつ！！

「返そう。こんなのもらっても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「・・・はあ・・・重い・・・」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。
取り敢えずその金塊の山はきっちり返すことにした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがもうやめさせよう。

某大晦日の恒例のあれに出る引き出しを開けるみたいなのドキドキ感はいらん。

「おとう、しゃ！」

「ん？」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていた。

上目遣いで俺を見てきたため、抱き上げて一夏と目を合わせる。

「どうした一夏」

「お、なか・・・しゅいた！」

「・・・さすがは親父の孫・・・成長が早すぎるな」

この一年で一夏はかなり成長し、舌つ足らずだが少しは喋れる。
第一声は“おとうしゃ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

どうやら密かにお姉ちゃんって呼ばれるのを楽しみにしてたらしい。
まあ、今は“ねえちゃ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり自慢してた。

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一夏と遊びながら一夏の誕生日の準備をした。

ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もう少しで三人でケーキを食べられそうでパパは楽しみです。

「・・・よし。千冬、そろそろ食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかった！私はお皿を出す！」

「みゃー！」

「一夏も楽しみか？でもまだケーキは食べさせられないから・・・
来年辺りには大丈夫だから。な？」

「みゃーうー！」

ズルいぞ！と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうしゃ”“ねえちゃ”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気ま

ずそうであつた。

それは置いて。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は・・・これでいいか」

「うわ・・・またすごいね・・・」

「あいいー!」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんぞ俺は」

「でも一夏は食べられないよね?」

「・・・・・・」

千冬のメスのように鋭いツツコミにより、俺沈黙。

それを見た千冬はハッとして慰めるようにわたたと手を振る。

・・・確かにそうだけださ・・・祝うくらいいいだろ? 息子のはじめての誕生日なんだからさ・・・。

「・・・・で。お父さん? また食べないの?」

「……いや。俺は食べなくても大丈夫なんだが……」

「駄目！しっかり食べてよお父さん！」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと二人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト目により空気が凍るのを感じた。

ビシッと俺を指差す千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は食べるのは好きじゃないんだがな……。

二日に一回の食事で持つし、ニート生活では丸二週間も食べなかったことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ？って思う。

だが娘となった千冬により、食事は必ず三食食べるように言われたおかげで58？だった体重が67？まで増えてしまったし……。

「……めんどくさいな……食わなくても死なないから俺は」

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時の他にジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいようになった経歴がある。

そのせいか、親父が死んで二ト生活をしていても餓死はしなかったのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65?と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持っていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「気合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。

取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。

・・・誰に話してるんだ俺？

「あう！」

「も、もう食えない！食えないから！」

「ほらお父さん。手羽先はまだまだあるよ？」

「千冬・・・謀ったな!？」

「うっん。お父さんの分も食べて太ったからって・・・オコッテルワケじゃないヨ?」

・・・すまん千冬。今度から量を減らすわ。

だからその手羽先を置け! 一夏はポテトを鼻に入れるな!

そんな風にして一夏の誕生日は楽しく過ごせた。

一夏、誕生日おめでとう。これからよろしくな。

織斑春樹、三十三歳。

織斑千冬、十歳。

織斑一夏、二歳。

取り敢えず次の日に金塊贈った馬鹿を血祭りにした。まる。

親父、祝う。（後書き）

というわけでございます。春樹は食べなかったからこそ、痩せていたわけです。

というか調べてみたんだが184?で70〜80?でデブの領域に入るらしいです。

普通は67。低くても64らしいです。

医者によって意見が違ふみたいだけど親父はそう言ってた。

親父、就職する。（前書き）

二ト脱退宣言。

アクセス、二十五万越えました。ISすげーと改めて思った。

原作まで何話かかるか・・・。

後書きまで続く。あんまり信じないでね？

親父、就職する。

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降っているが俺はとある場所に
来ている。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入っ
て預けている。

「採用」

「はやいなおいっ！」

とある場所、それは・・・

「じゃあ明日からお願いしますね。制服とかはこちらで用意
しますから。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でいいですか？」

「ええ、まあ・・・」

「大変ですねえ・・・二十歳で子供二人を・・・」

「ちょっとストップ。・・・年齢、書いてますけど・・・読み
ました？」

「はっはっはっは！もちろんじゃありませんか！二十・・・え？三十・・・四歳・・・？え、まさか嘘ですよね？」

「なぜ嘘と呼ばなければならないんだ・・・嘘言っても仕方ないでしょう」

「・・・ええええええええええっ！？」

静かなオフィスにて面接官の女性の甲高い声が響き渡った。

つまり、俺は現在・・・とある会社の面接に来ております。

仕事内容は清掃。姐さんのツテで探してもらって今日、こうして来たわけである。

——結果採用！のんびり働きまっせ——

「じゃあ今の通りをお願いします・・・ところで今日の夜は暇ですか？よかつたら私とホテルに行きませんか？」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。

食事ではなくやろうと言う面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言った。

・・・なのに何かに悶える姿ははつきり言って気持ち悪い。
説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かうことにした。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

与えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか」

めんどくさいがやろうか。姐さんがわざわざ紹介してくれた仕事だし。

仕事は明日からなので一夏を迎えに行くか。

―親父、移動。幼稚園到着―

「あ、おとうさん!」

「よう」

「こ、こんにちは織斑さん!」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう・・・」

一夏がいる幼稚園に着くと真っ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよ一夏君！？織斑さん、これ！伝達用のプリントです！」

「はあ・・・どうも・・・」

「で、では私はこれにて失礼しましゅ！」

わたたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏は呆然と見ていると顔を合わせて同時に首を傾げた。

・・・なんなんだ？

「・・・帰ろうか」

「うん！」

帰ることにした。

帰る途中で一夏と幼稚園の。。。君は絵が上手とか。。。ちゃんはいいいとか。。。先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

「でね！ほつきちゃんがおれにたまごやきをくれたんだよ！」

「ほー、ほつきちゃんねえ・・・可愛いのか？」

「うん！おとこっぱいけどかわいいよほつきちゃんは！」

さつきから“ほつきちゃん”の事を話す一夏は楽しそうだった。好きなのか？と聞いたら好きって何？と予想外の返答がされた。しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解できないのか・・・。

まあ、ゆつくりと教えていくか。

「で？そのほつきちゃんの上の名前はわかるか？」

「ん、ん、ん・・・し、しの・・・しの・・・しのめ？」

「東雲？^{しのめ}また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。おやつさんもその姓名を名乗ってるが息子が・・・なあ？

何かと俺がおやつさんの道場に入った頃から目の敵にされて毛嫌い

されたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけどね。そのせいでさらに目の敵にされることになるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほうきちゃんと仲良くな?」

「わかった!」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いているとすぐに着くもんだな。今まで、二人がいな間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかった。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。

二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思う。

「おとうさん、ちふゆねえはまだかな?」

「もう帰ってるだろ。時間も四時回ってるしな・・・で?今日は何が食べたい?」

「ハンバーグ!」

「よしきた」

一夏は喋れるようになると“ねえちゃ”から“ちふゆねえ”と呼ぶ

ようになった。

千冬も満更ではなく、千冬姉と呼ばれるのは嬉しいみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かったな」

「うん。今日は特に用事も無かったから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいか？」

「それくらいかな？もうちょつと早い気もするけど」

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・！手を洗ってから食えと言ったのにそのまま食べやがって！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおとうさん・・・!」

「黙れ。帰ってきたら手を洗えと言っただろうが」

「うっ! りふじんだよー! ちふゆねえもそうおもっでしょ!？」

「・・・残念ながら一夏が悪い。父さんは毎日手を洗うように言っていただろう?」

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケーキを食べ、千冬は学校からもらったプリントをズズイツと渡してきた。

えーっと・・・懇談会? またやるのか?

「それで父さん、面接はどうだったの?」

「開始五分で採用された」

「・・・なんで?」

「俺に聞くな」

「?」

千冬はマジかよ? みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえた

まま首を傾げていた。

まあそうなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思うよな。

なんでだろうな？まさかとは思うが顔で選んだ訳じゃないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「・・・いやいや。カッコいい顔してるのにそれはないぞ」

「なんか言ったか？」

「なんでも。それより父さん？今度の日曜日に用事があるんじゃないのかった？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからないぞ」

「・・・そ、それなら友達の家遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないと・・・誰の家に行くんだ？」

「束つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ・・・千冬がよく話していた束ちゃんか・・・」

束ちゃんとは千冬が新しくできた友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けて友達になったとは千冬から聞いている。

・・・お父さん、優しい子に育って嬉しい。

友達が多い千冬だが、あんな風に楽しそうに話すのは初めてのため、仲良くはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからなあ・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでるのを先生から聞いた事があるし。

「気を付けてな。家に入ったらお邪魔しますはきちんと覚えよ」

「わかってる」

「おとうさん！おれもほうきちゃんとあそびたい！」

「・・・んー、また聞いておくよ」

担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、エプロンをつけて一緒に料理中。

千冬はリビングのソファに座ってテレビを見ている。

だって・・・千冬が料理をすると暗黒物質ダークマターができるもの。

最初は頑張つて教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧なのができるのは暗黒物質ダークマター。

こんなとこまで親父に似なくていいのに・・・親父も料理や家事は

壊滅的だったからな・・・。

反対におふくろは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝している。

「ちふゆねえ、せなかからなにかでてる」

「・・・見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が漂っていた。

・・・親父より秋枝の遺伝かもしれんな。あいつも家事は壊滅的だったし。

^{チート}才能といい、いろんなところで親父似だな。千冬は。

一夏はどちらかと言うとおふくろ似だな。料理とか瞬く間に吸収するから。

取り敢えず千冬のハンバーグにはチーズを入れておこう。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

チーズ入りハンバーグを食った千冬は嬉しそうだった。まる。

明日から仕事も頑張る。まる。

親父、就職する。（後書き）

おわかりでしょうか？原作では千冬と束は高校生の時に会いましたが少し早めます。

あと第も。一夏に恋をするのでしょー！

ーおまけー

「は、はううう・・・／＼／」

今日、織斑一夏君の父親である織斑春樹さんと話した。

はじめて会ったのは一夏君が入園した次の日。担当として会った時にビビビッ！と来ました！

黒く女性も羨むような美しい長髪、見据えるは宝石のような赤い瞳。二枚目より三枚目と言えそうなルックス・・・。

「き、今日も織斑さん……か、カッコよかったな……／＼／」

プリントを渡してお礼を言う時の笑顔……ダメ！顔が赤くなっちゃう！

「……またか。美弥先生、またなのか」

「織斑君とこの父親らしいよ。シングルファーザーらしいし……私も狙ってるけどね」

「ああ、わかるわかる。あんなカッコいい人、滅多に見ないもんね」

「そうそう！家事もできるみたいよ！こんな優良物件は百年に一度の逸材よ！」

他の先生方が何か言っていたが私は織斑さんとデート（妄想）しているので聞こえなかった。

は、はわわわ……そんな、ここで……。

きゃー！織斑さーん！

「おい。誰か美弥先生止めろ。気持ち悪いぞ」

えへへ……いつか織斑さんを“あなた”と呼べる日が来るんじゃないか……。

いえ！自分でその未来を勝ち取ります！

「美弥先生が暴走したー！誰か止めろー！」

「うああああっ！？書きかけの報告書がああああっ！！！」

待っていてください織斑さん！私、貴女をゲットしてみせます！
私・・・山田美弥が！！

「ぶえつくし！」

「あれ？おとうさんかぜ？」

「かな？風邪薬飲んど」

なんて事があつたりなかったり（笑）。

あくまでもフィクションなので気になさらず
www

親父、出会う。(前書き)

ちょっと早いけど。

風邪が治らん。しばらく執筆できないので妄想しながらお待ちを。

親父、出会う。

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないようなので洗濯物を干している。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちよつと。

千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。

まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえってくるかな？」

「んー、もう少しじゃないか？時間的にもそろそろ学校は終わる頃だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「・・・迎えに行くか？」

「いく！あとなにかたべたい！」

「ならコロッケかなんかを食べ歩きするか。場所は・・・商店街のおっちゃんからもらおう」

「コロッケ！？おれ、だいすきなんだ！」

「おうおう。じゃあ行こうか。千冬の分も買つてな」

「うん！」

一夏は三歳。大体は喋れるようになり、歩くことも出来るようになったのでこうしてたまに散歩をするのが新しい日常になった。散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになってたりする。

・・・千冬に言われてから外に出るようにしたらまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

よくわからんが一般より少し重い体重になってしまい、絞るのにも苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言により、染み付いた習慣になりつつあった。

千冬のおかげでもうそれは無くなったがまだ断食の習慣は直りそうにない。

「おとうさん？きいてるの？」

「・・・ああ、すまん。聞いてなかった」

「もう！ちゃんと生きてよ！おれ、しょうらいはちふゆねえやおとうさんをまもれるヒーローになりたいんだよ！」

「ん。なれるんじゃないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチートな戦闘力ありそうだし（ボソツ）」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことがある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はぶんぶんと怒っているようだがコロツケを買い与えて機嫌を直した。

「じゃあ行こうか」

「おー！」

――親父、息子、移動――

所変わって千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゆねえ、まだかな？」

「もう終わってるはずだからもう少し待てば来ると思っよ」

もむもむとコロツケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線がバシバシ感じます。

「ねえ、あの人がカッコよくない？」ひそひそ

「うん。モデルさんみたいだね」ひそひそ

「結婚するならああいう人がいいね」ひそひそ

「わたくし、あの方に求婚しますわ！田中！あの方の経歴を調べなさい！」

「かしこまりましたお嬢様！」

という会話は二人には聞こえなかったが親父は間違いなく最後のお嬢様に狙われるだろう。

「・・・あ！ちふゆねえだ！」

「ん？」

時間にして七分待っていると校舎の玄関から千冬と変わった髪色の少女が出てきた。

・・・？千冬、なんか嫌そうな顔してるな？どうしたんだ？

「・・・おとうさん、あいつだれ？」

「・・・なんだあのガキは・・・」

千冬と少女は足早に玄関から出てこちらに歩いてくるが後ろからニヤニヤとここからでもはつきりとわかる気持ち悪い笑いをしたガキが追い掛けていた。

・・・取り敢えず殺すか。

「おい千冬！」

「！・・・父さん？どうしてここに・・・」夏まで

「どうしたんだ千冬？こいつ、お前の知り合いか？」

「あゝ？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかったのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走つてくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そうにしてるのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取ってそこから離れるように歩き出す。千冬は少女の手を取って歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おいオッサン、俺の千冬になれなれしくしてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」

「・・・喧嘩売ってんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかったのか？あんまりしつこいとお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるってな」

「はっ！嫁と話していて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから何をしようと勝手だろうが」

なんなんだこのクソガキは・・・！いいよな？殺してもいいよな？親もろともぶっ殺していいよな？

プルプルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おいオツサン。その手はなんだ？俺を殴っていいのか？俺は“如月コーポレーション”の御曹司だぞ！！」

「……………如月コーポレーション？……………あいつの息子か……………」

目の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。
……………似てない。金髪に黒と赤のオッドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月コーポレーションとは日本有数の大会社のひとつではあるが、残念ながら四季組の下にある会社である。

その社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知っている。

……………さて。如月コーポレーションの御曹司と言っていたが四季組組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか……………

「父さん、もういいから行こう。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「……………同感だな」

いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなと・・・」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだったな・・・」

ガシッとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で脅すように言う。

「織斑春樹。千冬の父親だ・・・次に千冬に近付いたら・・・わか
ってるな？」

「なっ・・・！？千冬に父親はいないはず・・・ぶべっ！？」

クソガキを離すと尻餅をつく。

その間に三人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、帰
路につく。

「なんであんなクソガキと会ったんだ？」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきたから」

「・・・なぜ相談しなかったんだ？」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思った。でも転校して二週間
経つとあんな風にエスカレートしたんだ・・・」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。

あのクソガキは二ヶ月前に転校してきたようで千冬を見た時から何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。仮に如月コーポレーションから圧力が掛けられても潰すから問題はない。

「それで・・・君は千冬のお友達かな？」

「うるさいよ。ちーちゃんの父親だからって気安く話しかけるな」

ビキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。罵声はプラスアルファ。

「東！ごめん父さん、東は人見知りが激しくて・・・」

「イインダイインダ。オレハオコツテナイカラネ？」

「おとうさん、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ？」

「なんでもありませんぐんそう！」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドリダゾ？
千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違ってし
っかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能の毒牙チートにやられたのか？

「いいか束？いくら束でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすることは許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してるからな」

・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む？どうした束？」

たはね
束と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシッと肩を
掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知ってる。

姐さんの病みモードの空気だ・・・。

「た、束？痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「いつ・・・」

「東さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうでもいいくらいにだよ？あ、篝ちゃんは別だよ？東さんにはちーちゃんと篝ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだよ？あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、東さんと篝ちゃんと宇宙に行こう。誰もいないちーちゃんと篝ちゃんと東さんだけで一生一緒に暮らそう！できたらちーちゃんの子供も欲しいな。男の子はいらない、女の子が二人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。ちーちゃんの愛があれば東さんは妊娠できるからね！んー、少しだけ待ってて。東さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さっぱり消えるから・・・ウフフフ。ちーちゃん、君は・・・東さんだけのものだよ・・・？」

・・・百合か？

「お、おとうさんこわい・・・！」

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない」

東ちゃん・・・だったか？見事に歪みに歪んでるな。

姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄ったりだな。

まさかこの年でヤンデレとは・・・千冬の将来真っ暗だな。

「だからね」

「・・・ん？」

束ちゃんは俺の目の前に立ち、狂気を孕んだ虚ろな目で俺を見ている。

・・・似ている。かつての俺のように世界から認められなかった（・・・）時と同じ目をしている。

「お前を殺して・・・ちーちゃんをもらっよ」

ならば・・・俺は親父にしてくれたようにこの子にも見せようか。

世界は広いことをな。

「・・・面白い。俺相手にそこまで言うとはな・・・いいぜ。相手になってやるよ・・・」
「束^{たばね}」

「気安く名前を呼ぶな！ちーちゃんに呼ばれるためだけにある名前なんだ！」

「と、父さん!？」

「心配するな。俺の事は知ってるだろ？死にやしないさ」

これが・・・世界を変える“篠ノ之束”しののの たばねとの出会い。

ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言われるのはまだ先。

そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ先。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

帰ったらコロッケ食べてたこと、千冬に怒られた。まる。

親父、出会う。（後書き）

束は最初は敵対します。

まあ、デレるけどね！天災夫婦としていちゃらぶさせたい！

√はまだ未定。ハーレムっぽくはするけど。

前の山田美弥、出そうか迷う。やまやの姉って設定で。

親父、思う。（前書き）

苦情は受け付けません。なんか浮かんどもん。

・・・熱に浮かされてるせいかな？

お気に入り二千件突破しました。ありがとうございます！

アクセスは416739アクセス、83672ユニークを越えました。

すげー上がりようだな。

親父、思う。

本日は雷鳴轟く嵐の日なり。

外の空は雨と雷がどしゃ降りであられず、家にいる奴もいるだろう。ニュースでも台風って言って警報が出ている。

そんな中、俺は・・・。

「あああつ！またやられたかつ！」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きながら立っていた。

周りにはここらを縄張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になっているのは彼女、束の仕業である。彼女と出会い、宣戦布告されてから早五ヶ月。彼女にあらゆる襲撃を受けている。

十一月に出会ってから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年を取った。

今月は四月。だがそろそろそれも終わりそうである。

「・・・取り敢えず帰るか。懲りたらもうシャブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう・・・くそが、てめえ・・・誰なんだよ・・・」

「名乗る必要はない」

そう言うのと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を亡き者にしようとし、今回は覚醒剤をばら蒔くグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。

返り討ちにはしたが。今回でこのような手は七十八回目である。毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするような事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

・・・そのせいで鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん？どれくらいかって？取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじゃないか？

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「・・・俺もお人好しだな・・・嘘だとわかってても動くからな」

ため息をつきながら自宅を目指して走る。

つーか雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。

懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行つたな。
・ おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。

他にも気絶してる間に親父にイカダに乘せられて太平洋に放置されたこともあつたな。

・ ・ ・ 鮫、怖い。

「ただいま」

「おかえりおとうさ・ ・ ・ わわわっ、おとうさんびしょぬれ！ちふゆねえー！」

「なんだ一夏、今私は・ ・ ・ と、父さん！？なんでびしょ濡れなんだ！？一夏、タオルタオル！」

「わかったー！」

「あ、ストップ。風呂に入るからいい」

家、マンションの自宅に帰ると案の定、千冬と一夏は慌てたようにバタバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになった靴を逆さまにしてぶら下げて乾かす。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まっていく。

それを千冬と一夏が拭こうとするが自分でやると言い、脱衣場にて濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場入室。

温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・束は頭がいい。それも同年代より遥かに、大人よりも。そのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかもしれない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいな。いじめもあつたようだし。

・・・似ている、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろうか・・・」

かつて親父と姐さんが助け出してくれたあの日、おふくろ・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言っていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。

そんな母さんに甘えた俺は信じられなかったのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかったが体が弱かったせいで死んだと舎弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかった。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまった。

母さんは・・・もう帰ってこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなった。部屋に閉じこもり、飯も食べずにずっと。

親父や舎弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかった。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姐さんもいたのに」

苦笑しながらシャワーを止めると風呂場から出てタオルで水気を拭く。

千冬が一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着るとタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん！ちゃんと服を着てよ！」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ると言ってきた。

前までは一緒に風呂に入ってたのにな。と思いながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姐さんと出会った日からだったな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな？ボクは■。よろしくね？』

そう言って姐さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかった。

その笑顔が、母さんとダブったから・・・。

俺は拒絶し、姐さんを殴った。

でも姐さんは殴られても止めようとはせずになた俺に殴られ続けていた。

『フフフ・・・君がボクを殴って気が晴れるならいくらでも殴られてやるさ。君のお父さんに頼まれたからね』

そう言う姐さんにまたも母さんがダブリ、辛くなった。

部屋からは出なかったがその時は怖くて、母さんがいなくなるような気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かず走っている。と姐さんに助けられた。

最初は何があつたかわからなかったが姐さんが俺を抱きながらコンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたのを見た。

・・・そういえば親父のやつ、トラックを海に向かって蹴り飛ばしてた気が・・・。

と、とにかく！姐さんは頭を少し打っただけで命に別状はなかった。簡単な検査で退院した姐さんは真っ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だったかい？怪我はなかったかい？』

その時の姐さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていた。それで感極まって俺は思いつきり泣いた。枯れたと思った涙を流した。

姐さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持っているだろう。

母さんという支えを失った俺、本当の支えがない束。似ている。

「それより父さん、何してたの？こんな嵐の中で傘も差さずに」

「傘は飛んだし、仕事があつたし。お前らは休んでいいな・・・
というわけで八つ当たりで今日の晩飯はゴーヤチャンプルーオンリ
ーだ」

「えゝ！またあのにがいの！？」

「理不尽だぞ父さん！せめてご飯を付けてくれ！」

「おかゆな。おかゆ」

ギヤーギヤー叫ぶ千冬と一夏をにやにやした顔で見ながらテレビを
つけてみた。

嵐の影響か、見にくかったがニュースは見れた。

『怪奇！湖を走る女性！？』

「・・・なんじゃこら？」

「えー、こんなよりあいぼう！あいぼうがみたい！」

「人が湖を走るのか・・・？そんなの父さんくらいじゃないのか？」

「千冬、お前はゴーヤチャンプルーと納豆を混ぜたものを食え」

「ごめんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これです！これが湖を走る女性です！』

「どうせCGだろ。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎」

「・・・でも父さんならできるよね？」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやったことがある」

沈黙する千冬に訳がわからないといった一夏。

俺は二本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビュ―された映像が映し出され・・・。

『やつほー。春くん元気かなー？』

「ブ——ッ——！」

「うわっ！？」

「ひゃっ！？」

そこに映し出されたのは姐さんだった。それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

な、な、な、な、な、なんで！？なんで姐さんがテレビに……？

よくよく見ると映像提供ロシア某局と書かれていた。

まさか姐さん……ロシアでまたやったのか（……………）？

『春くん、元気かな？できたら連絡ほしいなー！ボクに君の声を聞かせて？』

『……あの、誰ですかこの人は？』

キヤスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姐さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心がへし折られるぞ。

テレビには昔、最後に会った時から変わらない姐さんの笑った顔が映っていた。

……不老不死かあの人。俺より十以上年上のはずだぞ。

なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの方は……親父もだがなんで姐さん^{チート}も化け物なんだ？

「おとうさん、しりあい？」

「……うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になった人だ」

「お祖父さんの？父さん、でもあの方は二十歳前後に見えるけど」

「あれで十三歳年上だ。俺よりもな」

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗ったのは安心院なじみ（あじむ なじみ）だったか？

前に立ち読みしたジャンプのキャラに似ているのは間違いない。

確か・・・さ、さ、さ・・・なんだっけ？ロシアにある対暗部用暗部の十六代目の当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主って噂があるが・・・どうだろ？

親父にひけを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたことと呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。

小学五年生にご褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌まで入れられて喰われる一歩手前だったと記そう。

親父に助けられなかったら大切な何かとお別れをした気が・・・。

「・・・どういう関係なの？かなり親しいみたいだけど・・・」

「・・・そんなに睨むな。何を不機嫌になってるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。」

「さっき言ったがお世話になった人だ。おふくろが死んでからは母親代わりをしてくれてた」

「・・・ふーん・・・本当？」

「・・・なぜ疑う？そりゃあ、ファーストキスの相手は姐さんだが・・・」

バキィッ！

「ひえっ！？」

「・・・おい千冬。したんじゃなくて無理矢理されたからな？俺からは一切してない」

「・・・ふ、ふふふ・・・こいつは敵敵敵敵・・・」

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの

姐さんを睨んでいた。

・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。どこで育て方を間違えたんだ？

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

・・・そういえば束って名字何かな？知らないんだけど。

「え？束の？束は篠ノ之^{ノノ}のだけどどうかした？」

「・・・は？」

「あ！それぞれ！ほうきちゃんのなまえもそれだよおとうさん！」

「・・・し、篠ノ之・・・？千冬、一夏、マジでか？」

「「うん」」

・・・うわぁ・・・東雲じゃなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘かよ！
つてことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして生まれたんだな。彼女は。

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え？」

「篠ノ之なら俺も知ってるからな。挨拶するついでに東の話を聞かに行こう」

「父さん？なんで東の名字でそんなに慌てるんだ？」

「……
篠ノ之とこの先代、つまりは東の祖父なんだが……俺の、師匠なんだよ」

「……え？」

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十二歳。

織斑一夏、三歳。

今日の夜、夢に姐さんが出てきて喰われそうになり、怖かった。まるで。

親父、思う。（後書き）

安心院なじみはめだかボックスのまんまです。

最初は姐さんは哀川潤辺りにしようかと思ったけどめだかボックス見てこっちにした。

まあ・・・暗部の十六代目、といったらあれです。わかる人はわかるかな？

近い内に出すけどちょっと設定、あります。

次回は篠ノ之神社へゴー。

千冬も大概ヤンデレだな。おい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

織斑家の最強お父さん！

2011年10月29日09時19分発行